

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2018 夏号

83

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 東城跡の発掘調査

東城跡出土竪穴建物群（西から）

特集 東城跡の発掘調査

はじめに

和歌山県では、県道粉河加太線の渋滞緩和、沿線住民の利便性の向上などを目的として、和歌山市西部の西脇地区と東部の山口地区を結ぶ新たな道路として都市計画道路路西脇山口線道路建設事業が計画されました。

この道路は写真1のように東西にまっすぐに延びて造られつつありますが、事業計画時にその予定地の一部が中世の城跡として伝承されてきた東城跡に該当することが判明しました。このため、道路建設に先立ち平成29年8月から同年12月まで発掘調査が実施されました。以下、その発掘調査の成果の一端を紹介させていただきます。

東城跡の位置と歴史的環境

東城跡は和歌山市の東北部、山口西及び楠本に所在しています。地形的には、紀の川下流右岸に位置し、和泉山脈より紀の川に流れ込む雄ノ山川が段丘に造り出した扇

状地南端から沖積地上に立地し、雄ノ山川の周辺に南北に広がる標高10.5m前後の微高地上の縁辺部に当たります。

東城跡は、古代末から中世にかけてこの地で勢力を誇った中村氏の築いた城跡とされているものです。

この東城跡については史料が乏しく、わずかに明治から大正時代にかけて書かれた郷土誌のなかで「現今楠本の東川辺の小字宮西の地を明治以前は東城と称し、此は莊司中村氏の居趾といひ傳う」といった内容が記されているにすぎません。

これらは二次史料であり、その真偽については疑問が残るものの、当地の莊園としての成立年代や「中村氏」については、鎌倉時代に記されたいくつかの文献史料から莊園としての成立は12世紀後半以前であること、また中村氏については、鎌倉幕府の御家人であり、貴賓の熊野詣に際しては地元の有力量者として雑事の奉仕にあたったことなどがわかっています。

このようなことから、伝承されている「東城跡」については実在していた可能性が高い



写真1 調査地遠景（東上空から）

いものと考えられていました。

また、この付近の当該期を考える上では、先に述べた熊野詣との関連が重要と思われる。熊野詣が盛んになると雄ノ山峠を越えてから西に向かうのではなく、南下して当遺跡付近に所在していたと推定される「中村王子」を経て紀の川を渡り左岸の吐前はんざきへと向かうコースの利用が頻繁になります。いわゆる熊野古道として知られる道で、この付近はその渡河地として重要な地点であり、交通の要衝であったといえるで

しよう。なお、周辺の遺跡について述べておけば、県下でも遺跡の多い地域として知られており、東に隣接する川辺遺跡のほか宇田森遺跡・山口遺跡・藤田遺跡など弥生時代から奈良時代の集落跡が密度濃く分布しています。

調査の成果

今回の調査では、大きく分けて平安時代の後期末から鎌倉時代の前期にかけてと弥生時代の後期末から古墳時代の前期にかけての二時期の遺構面が確認されました。

以下、上面と下面に分けて主要な遺構の概略を記します。

上面の遺構

堀 1

調査区東側で検出された堀跡と考えられる遺構です。幅4.5m前後、深さ1.2m前後を測るもので、東西延長約38m、南北延長約20m分を検出しました。両者はほぼ直角に交わり隅部を構成することから、全体の形としては方形ないし長方形を呈する区画を取り囲む堀と思われる。今回の調査では、この堀の北西隅を含む一部を検出したといえます。この堀は調査区のさらに東側及び南側に延びているため、その全体規模



写真2 堀1 西北隅（北西から）

については不明ですが、確認された幅や深さからすれば一丁（約109m）四方ないしはそれ以上に及ぶ可能性も十分あります。堀の埋土は周囲の土により一気に埋められた状況を呈していました。また、堀底部にも長期にわたる滞水を思わせるような土の堆積は認められなかったことから空堀であった可能性が高いものと考えています。堀からの出土遺物は少ないですが、13世紀前半に帰属すると思われる土師器皿や瓦器椀などが出土しています。

この堀については、直接的に東城に係るものと断定する資料を得ていませんが、出土した遺物の時期や規模などからすれば東城と呼ばれてきた居館に伴う堀であると考えられるのが妥当と思われれます。

掘立柱建物 1

堀の内側で検出された建物跡で、2間×3間の規模を測ります。柱間はいずれも2.1m前後、柱の掘方は0.3mほどの円形を呈し、深さも0.3m前後でした。この埋土中より小破片ですが13世紀前半代の瓦器椀が出土してい

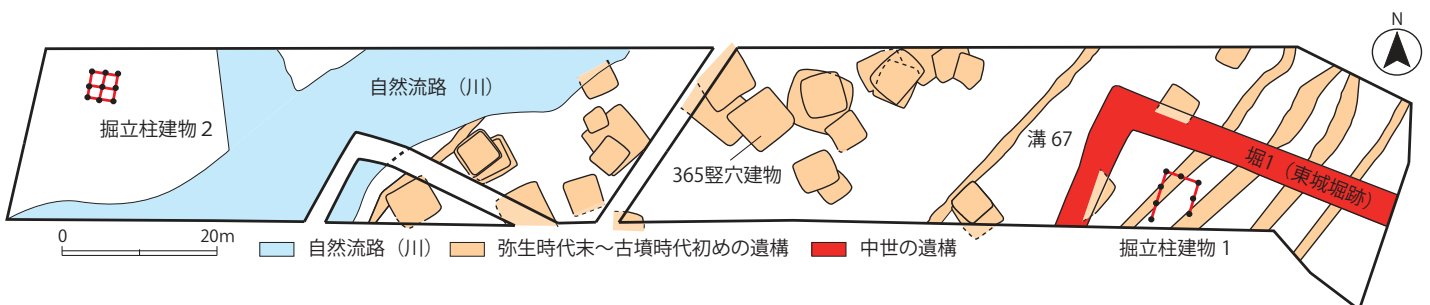


図1 遺構概略図



写真3 掘立柱建物1 (北東から)

ることから鎌倉時代前期に帰属する建物と判断されます。その時期やこの建物は堀の内側にあること、また建物の主軸方位が堀と同じことなどから堀に伴う建物と判断されます。ただ、その規模や堀内の位置から推して母屋などではなく付属的な建物であったと思われる。

下面の遺構

下面の遺構としては、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての竪穴建物のほか溝などが見つかっています。とりわけ竪穴建物の数は多く、建替えられたものや重複して見つかったものを含めれば29棟を数え

ました。また、深さ0.5mを超えるものもいくつかあり、紀の川流域の平地部で検出される竪穴建物としては、全体的に遺りのよいことが特徴と言えます。また、これらの遺構に伴って高坏・壺・甕などの遺物が多く出土しています。

365 竪穴建物

平面の規模は6.5m×6.0mで、北東から南西方向の辺がわずかに長い長方形を呈していました。比較的残りのよい状況で深さは0.5mを測ります。重なるようにして壁溝を2条検出していることから拡張して造り替えがなされたことが窺えます。この建物については床面の一部が一段高く造られるベッド状の構造になっていました。

主柱穴は4本で、大きさは0.4～0.5mほど、深さも0.5mとしっかり造られていました。煮炊きや暖をとったりするための炉は中央に設けられており、建替えに伴うものも含め2基を検出しました。このうち造り替え後の炉についてみると径0.5mほどで、深さは0.1mほどと浅い状況でした。また、南東辺の中央には壁に接して貯蔵穴が設けられていました。貯蔵穴は1.2×1.0mほどの方形を呈し、深さは0.5mほどです。この竪穴建物の埋土中からは弥生時代後期末ないし古墳時代前期と思われる高坏や甕などが出土しています。



写真4 365 竪穴建物全景 (南東から)



写真5 竪穴建物発掘作業状況

溝67

調査区の東側で検出された溝で、幅1.2m、深さ0.5m前後を測り北東から南西方向に流れていたものです。溝断面はV字状に近い形状を呈していました。この溝からの出土遺物は多く、とりわけ写真6のように下層部から集中して出土している傾向が認められました。遺物の詳細については今後の整理での分析を待たねばいけません。弥生時代後期後半段階の壺・甕のほか古墳時代前期まで下る時期の土師器高坏、甕などが混在しているものと思われれます。

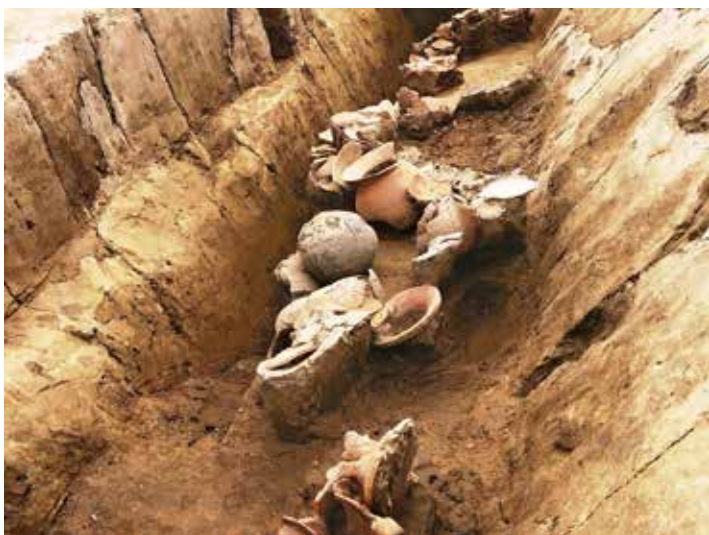


写真6 溝67 土器出土状況（北から）

自然流路

遺構ではありませんが、調査区の西側で北東方向から南西方向に流れていた幅30mほどの大きな川の跡が見つかりました。この川の埋土には弥生時代後期末から古墳時代前期の遺物も多く含まれますが、最上層から鎌倉時代の土師器皿や瓦器椀が出土していることから、最終的に埋没したのは中世段階であったと判断されます。

この自然流路の西側においては鎌倉時代の建物跡と思われる掘立柱の柱跡を数多く検出していますが、前述した竪穴建物など弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構についてはまったく検出されていません。このことからこの自然流路がこの時期の集落の西限域を画するものであったと判断されます。

まとめ

今回の調査成果としては、東城跡の堀と考えられる遺構を検出したことが挙げられます。これによってこれまで伝承の域であった「東城」の一端を捉えることができました。

時期的には平安時代末から鎌倉時代初期のものであり、戦国期ないし近世のお城などのイメージではなく、有力武家の居館と

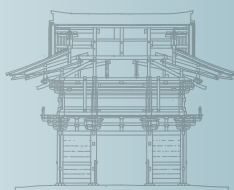
言っているでしょう。確認されているこの時期の居館としては、和歌山県内ではもともと古くなる可能性があります。

いまひとつの成果としては、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての集落跡を新たに当該地に見出したことです。

調査で検出された竪穴建物跡は29棟ですが、さらに広がっている様相が窺え、大規模な集落であった可能性も考えられます。集落の範囲としては、先に述べたように西側は自然流路まで、東側は今回の調査区東端で検出された溝群が東限を成す可能性が高いものと判断されます。

周辺の地形から推して集落は、北東から南西方向に延びる微高地上に展開していたものと思われれます。また、この集落の営まれていた期間は弥生時代後期末から古墳時代前期という短期間であり、その時代の前後を欠いています。こうした集落の展開や消長については西田井遺跡や田屋遺跡などの周辺の集落の動向と併せて考える必要があるでしょう。

こうした問題も含めて、今後のこの地域での調査に期待が持たれるものであり、今回の調査はその端緒、先駆けをなしたものであったと思っています。（村田 弘）



和歌山県指定文化財上岩出神社本殿の保存修理

上岩出神社は岩出市北大池に所在する神社です。根来寺旧境内の東端に位置します。かつては「白山妙理権現社」と呼ばれていました。『紀伊続風土記』には長承二年（一一三三）に覚鏝上人が越前の白山権現を勧進したのに始まり、天正一三年（一五八五）に根来寺とともに焼失し、その後再建されたとあります。境内拝殿前には灯籠が並んでいます。その中に天正一一年銘のある灯籠が一基あります。宮司の村田さんは「この灯籠は秀吉軍の焼き討ち、その後の再建を見てきたのだな」と感慨深げにおっしゃっていました。

現在の本殿は、正面間口が三メートルほどの中規模な三間社流造の建物で、優れた意匠の彫刻が各所にちりばめられています。昭和四四年に和歌山県指定文化財に指定されました。本殿は、昭和五一年に屋根葺き替えが行われました。前回の葺き替えから四〇年ほど経過しているので屋根全面に経年劣化が進み、棟の千木・勝男木にも破損が見られ、平成二九年度・三〇年度の二ヶ

年事業として県の補助を受け屋根葺き替え工事を行っています。



上岩出神社本殿全景

神社には文禄三年（一五九四）の棟札が存在し、構造手法からもこの時の建立であると考えられています。この棟札によれば施主は興山上人（高野山を秀吉から守った木食応其）、本願は覚榮法印となつています。紀の川市の三船神社本殿（重文）の天正一八年（一五九〇）の棟札に記された人物と同じです。大工は平国家となつていますが、大工の出目はわかっていません。

三船神社の造営に当たった大工は刑部左衛門吉次、根来寺大塔の造営を行った大工の家柄で、近親者の国次は宮城県にある瑞巖寺、大崎八幡神社（ともに国宝）などの造営に当たっています。また、同じく岩出市にある荒田神社の再建時には江戸幕府作事方大棟梁となった平内政信が江戸から故郷の神社に狛犬を送ったことが知られています。その頃の根来は大工のスーパースターを世に送り出していました（根来寺の仕事がなくなったことも要因のひとつですが）。木食応其が刑部左衛門とともに用いた平国家、腕利きの大工であった事は本殿からわかりますが、どこの誰なのでしょうか。やはり根来出身の大工だったのでしょうか。この本殿を見ていると想像がどんどん膨らんでいきます。（寺本 就一）



天正 11 年の銘がある灯籠

以前のコラムで、建物の写真が見る人に伝わりやすくなるように、物を片付けたり、掃除をしてから撮影に臨んでいと書きました。そうして環境が整ったら、カメラの設定を行うのですが、三脚に据えることによって、撮影の選択肢を拡げることが出来ます。

写真撮影では、建物の修理前、修理中、修理後など、どのように修理を進めたのかを記録していきます。各タイミミングによって、記録しておきたい箇所を、天気などの異なる環境に合わせ、カメラの設定や撮影場所を決定します。三脚は、三本の脚を自在に伸び縮みさせ、不安定な場所でも水平垂直を確保することで、想定した構図を実現する為に使っています。

ただ、修理工事において三脚とカメラを現場の状況に対応させて使いこなすのは簡単なことではありません。まず撮影準備に取り掛かる前に、それぞれの修理の種類によって、大切だと思ふ部分を意識して、写真で伝えたいことを考えます。そこから、「ここを撮りたい」という目的を達成するために、三脚の長さや位置を調整し、カメラを安定させてから、ようやく撮影の設定を行えます。

カメラの三脚は、使い方によって様々な高さに変化させることが出来ますが、その機能を最大限に活かせるかどうかは、使用する人の想像力や目的意識にかかっているように感じています。

(大給 友樹)



カメラと三脚

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

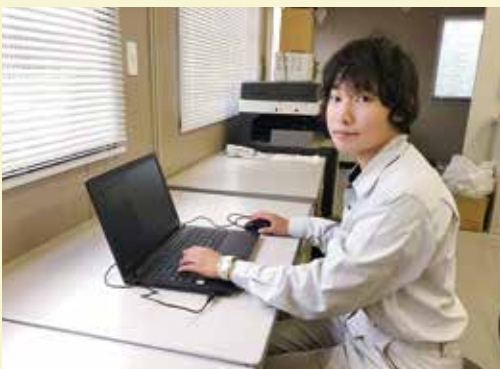


はじめまして。本年四月に新規採用されました森田真由香です。和歌山に暮らし始めて三ヶ月目となりましたが、ようやくながら少しずつ新生活に慣れてきました。

現在発掘調査を進めている和歌山城跡は、センターの職員として初めてかかわった現場です。同じ発掘調査であっても、補助員として参加していた学生時代と、プロの調査員として携わる今とでは、仕事や視点が大きく変わりました。また、私は学生時代に京都の発掘調査に参加していました。京都と和歌山では、地形や土の様子、遺構や遺物の出方が異なることを実感しています。こうした理由から、センターで働き始めてから新たに学ぶことが多いです。こうした理由から、センターで働く、勉強の毎日です。

今はまだ至らないところが多いですが、埋蔵文化財のプロとして早く一人前になれるよう日々研鑽し、職務を全うしていきたいです。夏より熱く文化財に向き合いますので、どうかよろしくお願いします！

(森田 真由香)



催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2018年夏～2018年秋)

(公財) 和歌山県文化財センター

- シンポジウム「地宝のひびき」 2018年 7月14日(土) 13:00～16:30
場所:きのくに志学館 2F講義・研修室

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 夏期企画展「学校にあるたからものⅡ」 2018年 7月21日(土)～9月2日(日)
- 秋期特別展「黒潮の海に糧をもとめて—古墳時代の海の民とその社会—」
2018年 9月29日(土)～12月2日(日)
- おしゃべり考古学② 2018年 7月13日(金) 13:30～15:00
- 連続講座「岩橋千塚⑥」 2018年 7月29日(日) 13:30～15:30
- 展示講座③(夏期企画展) 2018年 8月19日(日) 13:30～15:30
- 館長講座②「須恵器の話あれこれ」 2018年 8月25日(土) 13:30～15:00
- おしゃべり考古学③ 2018年 9月12日(水) 13:30～15:00
- 古墳公開 2018年 9月15日(土) 13:30～15:30
- 連続講座「岩橋千塚⑦」 2018年 9月16日(日) 13:30～15:30

和歌山県立博物館

- 夏休み企画展「城下町和歌山を歩こう」 2018年 7月14日(土)～8月26日(日)
- 企画展「和歌山の文化財を守る」 2018年 9月1日(土)～10月4日(木)

和歌山市立博物館

- 特別展「和歌山城再発見!」 2018年 7月14日(土)～8月26日(日)
- 特別展「お殿様の宝箱—南葵文庫と紀州徳川家伝来の美術—」 2018年 9月15日(土)～10月21日(日)

高野山霊宝館

- 第39回大宝蔵展「高野山の名宝“もののふ”と高野山」 2018年 7月14日(土)～10月8日(月祝)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「東城跡出土竪穴建物群(西から)」
- 2 特集「東城跡の発掘調査」
- 6 文化財建造物課 短信「和歌山県指定文化財上岩出神社本殿の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具⑫ 三脚
「新任のご挨拶」
- 8 催し物案内

風車83 (2018・夏号)

平成30年6月30日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp